



幕末の外交に就いて

法學博士
尾佐竹
猛

今回開かれましたる開國文化展覽會は、その數において、又その質において、眞に空前のこゝにありまして、恐らくは二度と、斯様な盛んな會は開かれな思ふほど、貴重な幾多の出品物に富んでをります。誠に我々これが研究に當る者にとつて、非常に有益にして、且つ近代史料を斯く多數集められたこゝは、深く感謝するところであります。出品せられたる數多の品は、これといつて貴重ならぬものはなきものばかりであるが、就中私共の最も興味を惹きますのは、徳川公爵家の出品になつてをる「軍帽」も、それから「ゼッケン」であります。これに對して島津公爵家から出品になつてをる薩摩琉球國勳章である。この二つの品が一堂に並んで出品せられてをるこゝは、無限の興味を感ずるのであります。この相對する二つの品が、幕末における幕府と薩藩の確執を物語つてをり、延いては英佛の外交の暗闘を物語つてをる貴重な史料であります。私はこの二品を主とし、幕末外交の事情について、些か申し述べたいと思ふのであります。



幕末維新の變革の原因は、今更申すまでもなく、外交問題がその重要な核心をなしてをるこゝは、顯著なる事實であります。英佛其他の東洋における角逐、これに對する日本國內における開國、鎖港攘夷のこの争ひについては、從來しばしば論ぜられてをりまして、今更私が喁々の必要はないが、たゞもう一步進んで、この外國の勢力が、如何に日本の國內の勢力に影響したかといふこゝについて、少しく申上げて見たいと思ふのであります。

結論を先に申上げますれば、當時幕府の背後には佛蘭西あり、薩長の背後に英國があつた。即ち幕府を支持せんとする佛蘭西政府も、薩長を擁護せんとするこゝの英國の政府——この英佛の東洋における角逐が、幕末維新の幾多の波瀾重疊たる政變を來してをるのであります。その中でフランスが最も早く幕府と親善になりまして、幕府を擁護するに全力を盡してをつたのであります。當時フランスにおいては、ナポレオン三世の全盛時代でありまして、野心満々、既に東洋に手を伸ばさんとしてゐたこゝまでありました。

當時幕府の後見職、後に將軍職に就かれまじたる慶喜公は、最も新進の方であらせられまして、その時分隊を召し上つたさいふので、「隊一」さいふ渾名がありました。一さいふのは一橋家を指すのであります、將に將軍になられんとする方が、隊を召し上るは怪しからんさいはれた。それでも構はぬほご新進の方であります。この際におきましてフランスの文物を採用せられまして、今日の横須賀鎮守府の前身、横須賀造船所を建設し、又陣の方におきましては、佛蘭西の陸軍教師を備うて兵制の改革をし、又幕府の組織いはゆる今日の言葉で申します内閣の組織についても、フランスの意見を容れられて、行政の大改革をなされるなご、着々親善政策が採られてゐた際であつたから、炯眼なるナポレオン三世の抜擢によつて東洋に派遣せられましたのは日本流で申す「ロセス」、當時のフランス公使ロツシユであつて、この人は辣腕家であつた。

この時ナポレオン三世より慶喜公に贈つて來ましたのが、この軍帽とゼツケンであります。フランス式の軍帽に葵の紋章がついてをります。この刺繡につきましては、フランスの上手な職人を選び、非常に苦心をいたしまして作つたものだからです。このほかに幾多の品物が來てゐるやうであります。今日徳川家に遺つてをるのはこの二つであります。この軍帽をつけ、更にフランス式の服装をせられ、フランス式の馬具をつけて、馬上に在らせられる慶喜公の寫眞は澤山残つてをる。私の方から出品するつもりであつたが、都合によつて今度は持つて参りませんでした。更に進んで慶喜公はナポレオン一世に私淑せられ、その服装も同じやうな服装された寫眞も澤山あります。斯様な具合で、幕府の内部におきましては、フランス公使の辣腕により、着々親善を重ねてをりました。

一面英國はさうかさいふご、最初に派遣せられました公使はアルコック、續いて有名なパークス、その他に公使ではありませんがアーネスト・サトウ、このサトウは極めて日本通で、常に日本語を使つてをりました。日本の事情に精通せるこれら英國公使は、これ又非常な辣腕を揮つた。殊に幕府の爲すなきを見て、薩長の尻押をして、これに對抗いたしたのであります。これより先き英國と薩摩とは戦をいたしてをるし、聯合艦隊と長州と戦ひをしてをりますが、兩者ともその

長所を認めまして、從來の鎖港説を一擲して、直に英佛ミ手をこるまで進んでゐた。又長藩主ミ英國東洋艦隊キング提督ミ、並んでゐる寫眞まで撮つてをる。このキング提督は更に鹿兒島に参り、つゞいて土佐の方に廻つて、後藤象次郎その他に會ひ、上下兩院論を説いた位であります。

この二大國の東洋における角逐をいたしましたのは、最も利害關係の多い國でありましたから、この争ひは激しくなりました。又その他の諸國も同様であつたミ思ひます。しかしオランダは永き貿易國でありましたが、國力が英佛程強くないので、それ程問題を起してゐない。又米國も最初開國の功はあるが、これはカリホルニア州に領地を擴めて、初めて太平洋を廻り、支那に航路を開く爲め日本の開國を迫つた情況でありまして、未だ英佛ほど重要な關係をもつてをりません。たゞ意外なのはドイツ——當時ドイツミ云ふ國名はなくプロイセンですが、その國人でガルトネルミいふ男がすばしく立ち廻つてをりまして、榎本武揚の軍が北海を平定いたしました際に、北海道の七重村近傍の地三百萬坪を、九十九ヶ年間租借の契約をしました。租借ミいふ言葉はその當時ありませんから、農業開拓ミいふ名義で、ガルトネルミ榎本ミ契約をいたしたのである。ドイツは膠州灣租借に先立つこゝ三十年以前において、既に魔手を東洋に伸ばして居つたのであります。これを想へば悚然ミして肌を寒きを覺ゆる位であります。幸ひに明治二年十月に至りまして、明治政府は非常に努力いたし、六萬二千五百弗にて此證文を買上げ、漸く事なきを得たのであります。

これらは國家ミしての行動でありますが、夫れ以外において、幾多の外人が活躍いたしてをります。交通不便の當時におきまして、危険を冒してまで日本に來つたこゝミについては、これには最も宗教的信念に富んでゐる人ミ、利權を目的として來る大山師ミ、この二種類の外人が來たのであります。この中宗教的信念に富んでゐる人はさておきまして、いろいろの外人が活躍してをる。譬へて申せば今日支那におきまして、支那浪人が活躍してをるやうに否夫れ以上に活躍してをる。でその一二の例を申しますれば、最も有名なのはオランダ人ミ申してをりますが、本來はドイツ生れのエドワードス

ネルで、これは會津から越後、東北の國に向つて盛んに鐵砲、彈藥を賣込んでゐた男である。自ら日本名前を「平松武兵衛」三名乗り、日本語を十分に話し羽織、袴をつけ、大小を差して日本人氣取りで、いろいろの利權を漁つてゐた。先般亡くなられた大倉男爵は、實はこの男の下働らきをして、鐵砲彈藥の賣買をされてゐた。それから陸軍御用商人に榮達され、盛んに儲けられた。なんら悪いこゝちはない、商賈で儲けるこゝちは何も差支へない。

それからこれについて、長州に居りました英國人のパウンド、これもなかなかの曲者で、自ら日本名を重井鐵之助といひ、この男も同じく日本語を使ひ、羽織袴をつけ、甚しきは日本の女にまで關係してゐる。斯ういふ連中が來てをる。少し毛色の變つたところでは、フランスのカウント・モンブランといふ者で、この男は後に申上げます勳章の一件に關係して、薩摩に來て居つた。しかしこの男は薩藩主に向つて、上下兩院説を講釋した一人であるから、なかなか知識的に開發した人でありました。このモンブランの説が各藩の人々に傳はり、西洋思想を鼓吹したと云ふこゝちは、特筆すべきものであります。

それからもう一人の男はヴァンリード、これはしばしば話に出ます高橋是清氏を奴隸に賣つた男で、のちの總理大臣を奴隸に賣つた、甚だ不都合な男でありまして、明治初期にかけて奴隸賣買をいたしてをりましたため、到頭放逐された。これも極めて日本通でありました。彼の有名な生麥事件の際、あの事件の起る一時間前に、薩摩の行列に會つたのがこの男であります。彼は日本通でありますから、馬から下りて馬の轡を三つて道をよけ、帽子を脱いで敬禮をしてをつた、め無事であつた。その後へ參つたのがかのリチャードソン一行で、到頭薩摩軍人の刀にか、つて倒れた。この事を聽いたヴァンリードは「だから言はないこゝちではない、外國人が支那人に對するつもりで日本に參つたら、途方もないあやまりである、俺れがいつた如く果してこの間違ひが起つた」といつた。これほどの日本通であります。この男は御承知の通り、慶應四年から明治二年の間、横濱で發行した「もしほ草」といふ新聞の出版主であつて、岸田吟香が關係してゐる。それから榎本武揚の脱走の際にも、布哇に來ないかと言つた位りの男である。それから長州征伐の際におきまして、

幕府の形勢が日に悪くなつて来て、長州が獨立して外國と通商するこいふやうな噂を耳に挟むや、早速驅付けて行つた。長州までは行かなかつたが、京都まで來ました、大阪まで位のは來たでせう。彼はいよいよ長州が開港するやうになれば、馬關附近に一千町歩の地面の拂下げをうける運動をなしてをる。斯様な男が幾人も暗中に活躍してをりました。これはまだ變動の甚しかつた時期でありますから、已むを得ぬ次第であります。

最も大きな根本問題としては、英佛關係、その中更にフランスと幕府とが、如何なる程度まで親善であつたかこいふ問題であります。これにつきましては、屢次問題になつてをりますのが、小栗上野介一派の説として、勝海舟の口から傳つてをるのがあります。即ち二度目の長州征伐の目的は、フランスより軍艦及び軍資を借り、長州を叩き潰し、その勢に乗じて更に薩州を叩き潰し、全國の大名を潰して、徳川の下に郡縣の制を布かんこいふのである。斯ういふ説を小栗上野介から聞かされて、勝海舟自身は身の寒さを覺えたを傳へられてをります。がしかしこれに對して一派の説は、幕府當局は左様な意見はない、元來小栗と勝とは仲が悪いから、勝の説も少し割引せねばならぬこいふのである。この頃いろいろ小説その他に、小栗のこみが題材になつて、この問題にも時々觸れてをるやうである。これは長らく疑問のうち閉ざされてあつたのでありますが、追々これに關する史料が発見されてをります。こにかゝるこれらは幕末外交上の秘史として、極めて必要である事柄でありますから、少しこの點について述べたいと思ふ。

◇

當時幕府とフランスとの親善であつたこいふこみは、先程申した通りであるが、だんだん進んで軍事同盟まで出來た。これが密約と申しますもの、出來た初めてでありまして、何年頃かこいふこみ、文久三年池田筑後守の一行が、フランスに參つた時この話が出たのであります。幕府から第三回の海外に派出せられた使節、池田筑後守一行の役目は、極めて悪い役であります。これは國內の反對に堪へかねて、鎮藩の談判に行つたものであります。大體これは幕府自身も、その効果を豫期してをならず、たゞ世間に對する申譯け、朝廷に對する申譯から派遣された使であつたから、甚だ割の悪い使であつ

た。されば右の役目は、無論その目的を達するわけに行かぬばかりでなく、この正使池田篤後守は、當時二十八歳の新進氣鋭の士であつて、國を出る時は盛んな攘夷論を主張してをつたが、フランスに行つてからはあべこべに、スツカリ開港論者になつて歸つて來ました。鎖港の使に行つた者が、却つて開港の意見を述べたのでありますから、上陸するに間もなく閉門、こいふ誠に有り難くない使でありました。

この談判の中にナポレオン三世に謁見いたし、又フランス外務大臣にも會つてをるのでありますが、その際に向ふの外務大臣の意見は「國內に反對があつてさうしても開港出來ぬこいふのは、一體誰れが反對するのであるか」こいふので「それは長州や薩州こいふ有力な大名が反對いたしてをる」こいふこ「然らばさういふものは叩き潰せばよいでは御座らぬか」「いや左様なこゝが出来るものではない」「出來なければフランスから軍艦三艘を、軍資六百萬兩をお貸し申すがさうか」こいふ始末で、我が使節も面喰ひ、全く寢耳に水のいはゆる有難迷惑の頂上であつて、容易に即答は出來なかつた。そのこゝについては、表面具體的な案は出來なかつたやうでありますけれども、だんだん調べて見るに、驚くべき秘密條約が、この時締結されてをつたのであります。當時のフランス外務大臣ドルーアロイスとの間に、この條約が締結された。それは丁度英、米、佛、蘭の四國軍艦が、馬關砲撃に行く少し前でありました。この談判によつて結ばれた條約の中に、驚くべき二ヶ條があります。それは

第二條の「大君（英訳）（徳川將軍のこゝ）の使節日本へ歸着の後三ヶ月の内に、日本政府は馬關海峡を過ぎんことを欲する佛國船の妨害を除去せしめんことを約せり、而して己むを得ざる時には兵力を用ひ、又時宜により佛國海軍分隊指揮官と一致して、此通行をして妨げなき様なさん事を約せり。」

第四條の「右の約定は千八百五十八年十月九日、佛蘭西と日本との間に結びたる條約の犯すべからざる部分の一部を以てし、雙方主君（日本は徳川將軍）の本書交換を要せず、直に實行すべし。」

斯様な條文で、秘密條約として批准交換はやらない。しかもこの文句の中に「佛國海軍分隊指揮官と一致して」云々

書いてありまして、少なくとも佛國の指揮の下に、馬關海峡を通行するといふ、驚くべき密約が出来てをつたのであります。この條約を結んで歸つて参りましたが、幕府内部においても、これには非常に議論があつたので、結局秘密のうちに葬られて仕舞つたのであります。外交上これを「巴里廢約」と云つてゐます。この使節が歸つて來るといふことは、日本のフランス公使の方にも聞えてをつたから、聯合艦隊が將に馬關砲撃に、横濱を出發せんとするに際して、フランスの軍艦だけは二日遅れて、使節の歸りを待つてゐたのであるが、いよいよ歸つて参りましたところが、幕府内においても左様なことは大變であるといふので、この條約は先程申した如く、秘密のうちに葬られてしまひました。それ故佛國の軍艦も引續き出發して、いはゆる、あの有名な聯合艦隊の馬關砲撃となつたのであります。とにかくこの條約は廢約となつたのであるけれども、少なくとも幕府の内部において、この空氣が醸成されてをつたといふことが分るのであります。



然らば誰れが親善論の主張者であるかといふは、無論これは小栗上野介その一味であります。當時の記録によりますと松前伊賀守、酒井飛騨守、竹腰隼人止なごみな親善論者であつて、親善論者の話の一部が勝海舟の方に洩れたと見てよろしい。この情勢がだんだん濃厚になつて來まして、二度目の長州征伐には天下の大名を率ゐて、將軍自ら大旗を大阪城に進められて、長州征伐をされたのである。造作なく長州が亡ぶると思ひのほか連戦連敗、こゝにおいて天下の大名頼むに足らずとし、當時將軍職に就かれてはゐなかつたが、幕府の實權は慶喜公にあつたので、將軍直屬の旗本の勢をもつて、長州へ討入らんとしたがこれも駄目、大名もいかず、旗本もいかず、斯うなる幕府は、さうしても長州を叩き潰さねば面目が立たん、なんでももう手段方法は選ぶところでない、いは、「溺れる者は藁をも掴む」の譬へで、斯うなつてくるに誰れいふもなく、最も親善な佛國に頼らうぢやないかといふ弱音が出て來るのであります。

これは幕府の樞機に參與してをる連中の中にまで出てくる。當時のいろいろの文書を漁つて見ると、松平伯耆守の意見紀州藩の竹内孫介の意見にも、外國の力を借りてやらうといふことが精しく出てゐる。更に意外なのはこれも近年發見さ

れたのでありますが、福澤先生の上書云ふものがありました。これにも矢張り外國から船軍資金を借りて、長州征伐をしたがよいこいふ趣意が見えてをります。實は福澤先生としては大變な史料でありまして、福澤先生關係者側では却つて秘密にしてをりますが、これは明かにした方がよいだらうと思ふ。さうして又このこいをはれたか判りませんが、これは確かであります。

斯ういふ情況は直ちに反對側の薩派の方へ響いてをる。慶應三年七月二十七日西郷隆盛から大久保利通への書面の中にも左様なこい書き送られてをります。即ち幕府における小栗一派の説が、反對側の薩藩の方へ洩れてをつたのであります。かくの如く幕府が佛國の助けをうけるこいふこい傳つたので、英國側も斐如たるわけには行かず、先程申した英國公使が、幕府側がもし左様なこいを謀れば大變であるから、萬一のときは何時でも刃刀いたさうこの口物を洩らしたのである。ところがこれに對して流石に西郷兩洲先生である、答へが立派なものである。「日本の政體變革の儀は我々の力において盡すべきで、外國の力をうくべき筋合のものでなし、もし助力をうけては、外國に對して面目ない次第であるから御斷り申す。」ミキツバリ斷つてをる。流石兩洲先生である。これミ恰度同じく、幕府が倒れまして鳥羽伏見の戰爭當時、佛國に滞在してゐました栗本安藝守（鋤雲）に佛國側から幕府を助けてやらうかミ言つた時、幕府の方でも斷然外國の助力はうけませんと斷つてをる。誠に薩摩にも幕府にも、その人あつて國家の爲め幸であつたのである。

これらの史料は略判つてをるが更に一昨年或るころから驚くべき史料が出て來た。これは極く秘密の書類となつてをります。それは長州征伐の幕軍の總指揮官たる小笠原壹岐守が丙申六月二十五日夜、佛國ロツシュミ秘密の間に會見した問答の筆記であります。これによるミ、佛國が、幕軍を援助してをるこいハッキリ判つて來た。この中には驚くべきはさういろいろの事情が書いてあります。極く長いから必要なこいをつまんで申します。これは恰度長州征伐の際でありました。慶應二年六月二十四日佛國軍艦が長州に参りましたときに、英國軍艦はあを迫つて長州へ來た。この時の兩國軍艦の表向き言分は、幕府ミ長州との戰爭を仲裁するためこいふこいになつてをりますが、いづくんぞ知らん左様な軍

純なものではない、佛國軍艦が来たのは大いに考ふるべきところがあつたもので、フランスの軍艦が出るに、それを牽制するために来たのが英國の軍艦である。

この時に馬關に碇泊してをる佛國軍艦で秘かに小笠原壹岐守と會つて話をしてをるのであります。また一面においては當時の大立物桂小五郎、後の木戸孝允が秘かに英國の軍艦に行つて何か話をいたしてをる。まことに虚々實々の外交事情のあるところであります。この木戸公の英國軍艦との話の内容は分つてをりませんが、あればさ綿密に澤山書いてある同公の日記のうちに、これだけはない、幸に幕府側の文書だけは出て来たのである。

この佛國軍艦において、小笠原壹岐守との間に交された問答を見ますと、何から何まで相談してをる、もう實に一から十まで佛國の公使に相談してをる。極端な言葉で申せば、第二回の長州征伐は佛國の長州征伐といつてもよい位に進んでゐた。のみならず戦争が始つたときの一般方略迄、佛國公使の指揮をうけてゐるのである、その中に斯ういふことがあつた。佛國公使の意見では、「幕府の富士山艦をもつてこの長州の東地方を砲撃し、翔鶴丸をもつて引島を討つて兵卒一萬をもつてこの島を護り、萬一外國船通過の際に兵器等を密賣するやうなことがあつたら、これを抑へる都合にする、又要所々に大砲を備へつける、大島郡方面よりの討入りはよろしくない、こちらから討入る方が至當である、それから下關に迫つた軍と小倉の勢を合して討入ればよい」ミフランス公使が斯様に、一般戦略まで立入つて指揮してをるのであります。そこで小笠原壹岐守は更にロツシユに對し「貴方の見込みでは下關には長州の兵力がどれだけあると思ふか」と聞いてゐるが、これはあべこべの話である。「マア二三千人ある、軍艦は一隻のほかない、薩摩の船が一艘ある、それも大した船ではない」斯ういふことまで判つた。つまり佛國軍艦は幕府の爲めに偵察に行つたことがスツカリ分つた。それからなかなかこの佛國公使は辣腕家であるから「英國は全くこれは薩摩にだまかされてをる」と、一面では幕府の氣を引いてをる。そこで小笠原壹岐守は「公使の御言葉によつて大いに諒解いたしました」と云つてをるが、薩張りなつてゐるまい、それから又軍艦借受の話とか、いろいろのことにを申してをります。が遂にはいよいよこの戦争が済んでから、さうす

るかといふ跡始末まで相談いたしてゐる。「戦争が済んで幕府が勝つて、長州の大守が降参したならば、海岸通りの領地を取上げ、毛利大膳大夫を何れにか放逐いたすがよい」ミ佛公使がいつてをる、實に驚くべきものです。ミころがさうも相變らず、小笠原壹岐守薩張いけない「それは尤ものことであるが、もし左様にいたしては、大膳大夫が承知しません」ミいふミ「承知しなかつたら首を斬れ」。なんにも申上げやうがない當時の状況であつたのであります。



これらの問題は軍事上の秘密であるが、更に驚くべきことは、幕府は財政に困難を來した結果英佛兩國に向つて借款の交渉をしてをる。この戦争の費用が非常に莫大にのぼつた、最初英國に申込んだが、これはいろいろの事情のためものにならなかつたので、今度は佛國に申込んだ。慶應三年四月十三日に、佛國公使ロツシユより慶喜公への上書の中に、斯ういふ文句がある。「この度の借財のことにについては望み通りの質を差出すべし、その質の中には大君（たいきみ）（徳川將軍のこゝ）收納の内たる蝦夷地を質に取らせん、政府の收納及び英佛の大商社へ與へんミする蝦夷地の金銀山より出づる高を以て、右借銀の元利を拂ひ納めんミす」つまり北海道を抵當ミして借金するこいふ、驚くべき窮策である、一步あやまれば日本の國運は、岌々ミして危殆に瀕してをつた當時の状況であつたのである。

しかし幸にして、幕府にミつては不幸にして、この借款は兩方共成り立たぬやうでありましたが、佛國に對しては、一部の契約が出来たやうであります。この文書は小栗上野介の遺物から出て來たのであります。それから斯ういふ場合でありましたから、幕府の長州征伐が失敗に終りましたあらゆる原因が論ぜられてをるが、要するに斯様な内情では迎もいかぬ、幕府の長州征伐は失敗に終つたばかりでなく、一轉して形勢は急轉直下し、幕府が政權を奉還しなくてはならぬやうになつたのは、長州征伐が重大なる原因をなしたのである。かくていよいよ政權が奉還になりました、鳥羽伏見の戦になります。あの直接の動機をいたした有名な、幕府の三田藩州邸焼打ちが起つたのであります、この時の薩州邸焼打ちの一般方略も、當時の幕府の軍事顧問であつた佛國砲兵大尉ブリッウネの方策に出てをるのであります、いづれの方面から如

何なる大砲によつて討つかいふ、精しい書面まで出来てをったのであります。

それからいよいよ鳥羽伏見の戦争になりました、幕府が大敗いたし、慶喜公が天保山沖から開陽丸に乗り、江戸へ逃げ歸られる。その際に列國の外交團は兵庫にありまして、列國軍艦も攝津灣に遊弋してをりました。英國艦隊はもつここの形勢に注意してをりましたので、さうも幕府の軍艦へ高貴の方が乗込んだに違ひないミ、さかんに望遠鏡をもつて開陽丸を見る、更にその附近で戦闘準備をして、示威運動をやつてをるので、幕府の重臣は戦々恟々してゐた。それからいよいよ慶喜公が軍艦に乗られ、江戸に歸られる途中にも、開陽丸は浦賀灣に一泊いたしてをる。慶喜公は御承知でなかつたが、その際に海軍奉行山口駿河守が、組頭の高畑五郎を連れて浦賀から横濱に上陸して、佛國公使館を訪ねてをる。その話が如何なる内容のものであつたか分りませんが、話は略想像に難くない。

かくして慶喜公が江戸に歸られるや、早速佛國公使が面會を申込んで、佛國は幕府の爲めに、従前の親善により兵卒をお貸し申すこいふことを申込んだ。しかしながらこの時流石慶喜公です。「御厚意は有りがたいが、日本の國體は他國と違つて、たゞい如何なる事情があつても、天子の軍に刃向ふ事は出来ない。」ミキツペリミお断りになつてをられる。これには流石の佛國公使も感服して引下つてをる。誠に慶喜公の偉いところである。ミところが一方主戦論者の小栗上野介一派は、なかなかこれに承服いたしません。この文書は近頃出て來たが、それは江戸城明渡しの前、佛國商人ミ小栗が契約をいたしてをる。それは小銃一千挺、これに伴ふ彈藥を買受けるこいふ文書が出て來たのである。ミところが流石商賣人です、現金八萬兩ミ引換へでなければ一挺でも渡すわけにはいかぬこいふので、この交渉は金がなかつたのでおぢやんになつた。斯くの如く小栗は極端なる主戦論者であつたため、慶喜公自ら免黜された。幕府の重臣大官が直接將軍から免職されたのは、これが初めての終りである。ミにかく左様な情況であつた、それから小栗は元の領地上州に引取つたが後官軍に捕へられて殺された。

斯様にいたして江戸城明渡し前後は、重大の問題がありました、のちにこれは述べますが、覆本武揚が艦隊を率ゐて北

海道に脱走する際にも、幕府の顧問である佛國士官が十人乗込んで、一切を指揮いたしてをるのであります。のちになりまして東艦、當時申鐵艦といつてをりました有力な軍艦を奪ひこるために、幕府に官軍との戦ひがありました。只今の東郷元帥なきが初めて出征されたのは、この時の戦争であります。この際にも佛國人がいろいろ指揮してをりました。又最後に榎本が降伏した際にも、佛國人が多数入つてをりました。斯くの如く幕府のため劃策して、新政府に反してをつたために、佛國公使の遣り方は常に後手々々になり、英國公使は先手々々に廻つてをりました。こゝにおいて明治政府になるに、英國公使パークスが非常な勢をもつて日本の要路を威嚇し、傍若無人の舉をした所以は、この幕末における英國の働きに基因するに大なるものがあります。



そこで一體この外國公使の辣腕は勿論であります。英佛その他の國に利害關係が、重要な外交問題に反映したことは無論であるが、第一の問題は理論として、日本の朝廷に幕府の二元主義の政治が、外國人に不可解である、外國方面ではいづれを助け、いづれを保護すべきかといふことが、重要な外交上の問題であるのであります。外國から見ると日本の主權者は果して誰なりやといふことが、幕末におけるもつとも重大な問題である。幕末當時ばかりに限らず、それより以前外交問題の起る度に既にしばしばこの問題に觸接してをりました。

最初慶長年間におきまして、朝鮮使節が日本に参りました際、即ち慶長十二年朝鮮使節呂祐吉の幕府に出した國書によるに「日本國王殿下」にある。これに對する返事を出すに、如何なる肩書を用ひたらよいかといふことが、幕府當局の問題となつたのであります。この時いろいろ議論があつたが、結局軍に「日本源秀忠」として出したのであつた。次で元和に朝鮮の使が来た時の返翰には「日本王源秀忠」となつた。それから寛永の時になるに「日本國王」とすべきか「日本國王」と書くべきかといふことについて、非常に議論があつたが、結局「日本國王」として返翰を出してをる。これではいくら幕府全盛時代でも物議の種となつた。寛永十三年には爾今朝鮮國王の書には「日本國大君」と記すことになつた。こゝ

これはズット後まで使用された、そして當方よりの返書には、日本國姓某といふことになつたのであります。この「大君」^{オホキミ}といふのは幕末に盛んに用ひられてをります。有名な室鳩巢の「赤徳義人録」にも、將軍を指すに「大君」の語を用ひてをる。この事について新井白石が朝鮮使節に如何なる肩書を用ひるかについて、雨森芳洲と議論したことは有名な話であります。

それからは外國に對する將軍の文書は、總てこの「大君」^{オホキミ}といふ語を使つたのである。最初日本に参りました有名なツイリアム・アダマスも、家康を指すに皇帝といふ文字を使つてをる。それがだんく問題が紛糾してくるに、日本では江戸のほかには主權者があることが分つて、これが非常に六ヶしい關係になつて、外國人は分らないといふことであつた。そこで外國人は斯ういふ判断をこつた、それは外國人相應な考へで、當時としてはもつともな説である。實際の政權を握つてをるのは江戸である。神聖なる皇帝、宗教上の皇帝は京都の「御門」^{ミカド}である。恰度ローマ法王と皇帝のやうに考へたのは、己むを得ない當時の解釋であつた。これらのことが追々向ふから参りました文書の中に現はれてをる。しかし條約締結の際には、いづれも「大君」^{オホキミ}といふことになつてをります。安政條約の際に、これからは「大君」^{オホキミ}といふ名稱を使ふに特にいつてをります。この幕末の政變が紛糾したとき、外國人はこれは「御門」^{ミカド}と「大君」^{オホキミ}との戰爭である。斯う解してをつた。最初日米條約締結に力を盡したヘリスの日記を讀むと、これを解釋するのに非常に苦しんだことがあります。

本來なれば幕府は、朝廷より委任せられた權限内において、條約締結をしていつたのである。現に家康、秀忠の頃には外國と交渉をいたしてをる際には、京都の命を受けてをりませぬ。もし幕府が有力にして條約を締結してゐたら、日本國民も幕府に全權があると思つてゐたかも知れませぬし、又京都においても左様にしばらく考へられたかも知れませぬが、幕府が自己の責任のがれの爲め、朝廷の勅許を要するといふことを言ひ出したため、外交上の難問題が起つたのである。幕府が條約には勅許を要するといふに、外國側では、それでは直々に京都に迫つて條約を締結すればよい、江戸が主權者でなければ直に京都に行く、夫れでは困る、といふ有様でした。この爲め朝廷においてはだんだん大權を回復せられて、

朝廷の命を受けなければ幕府は何も出来なくなつて来たのであります。一時のがれの姑息手段のために、幕府は取返しのつかないこゝまゝなつた。日本國家としては極めてよいわけで、幕府の方から見ますと、當時の政治家の姑息手段のために朝廷の勅許を要するといつたのが、幕府倒潰の原因になつたのである。

さて外國側ではこの英佛公使の暗闘が最高潮に達するのであります。慶應三年三月になりました。慶喜公が十五代將軍として一世の衆望を負うて、大阪城で將軍職に就かれた際に、慶喜公は大阪城において各國公使を引見せられてゐる。幕府としては破天荒の進んだ遣り方であつた。これについて英、佛公使の間において議論が行はれた。英國公使パークスは頑として反對して日本全國の主は「御門」である。「大君」は主でないから謁見する必要はないといふたのに對し、當時佛國公使はなかなかの辣腕家で、かう説明してをる。貴公はさういふけれども、米國大統領は貴國の皇帝と同じ禮を受けてゐる、米國大統領といふのは、四年間の任期をもつて人民より政權を委任せられてをる、日本の大君——江戸の大君は京都の「御門」より大權を委任せられをる、故に人民から委任せられてをるも、朝廷から委任せられてをるも同じである。一寸うまい説明で、甚だ詭辯ではあります。理窟は一寸立つてをる。まだ完全に實權が朝廷に回復せられてをらず、實際の權力は矢張り江戸にあるから、英公使も暫らくこれに服して、いよいよ謁見するこゝまゝになりました。

この際におきまして更に問題が最高潮に達しました。日本の内地ばかりでなく、佛國パリまでこの問題を持出したのが、薩摩琉球國の勳章であります。慶應三年はナポレオン三世の全盛時代でありまして、佛國において萬國博覽會が開かれ、日本へ賛同を申込んで来たのであります。日佛親善はこの時にありまゝいふので、幕府から「大君」代表の肩書ある徳川氏部大輔たる昭武侯を差遣した。この人が後の水戸侯になられる方でありまして、この時の隨員の一で濫澤篤太夫といふ人があるが、これが今の濫澤榮一子爵であります。當時堂々日本代表として、幕府の威嚴を世界に認めしめやうといふつもりで、一行は出られたのであります。が途中既にいろいろの問題が起つてをります。一行が英國領に入るこゝ、全然主

權者扱ひをしない、佛國領に入るに立派な扱ひを受けるにいふ、妙な話してありました。最初香港に参りますてんで待遇しない、更に進んで船がフランスの領地である西貢に参ります、此處は佛國領であるから二十一發の禮砲を放つて、これを待遇するにいふ有様であります。それから新嘉坡、錫蘭に参ります、薩張り待遇しないにいふやうな次第で、甚だ妙な具合でありまして、佛國に入つてからは無論堂々たる國賓としての歓迎でありました。

ところがこれより先き薩藩におきましては幕府の手を経ず、直接自分の方から出品いたしてをりました。丁度その時向ふに参つてをりましたものも、これも幕府になんの届出でなくして軍器、銃砲、彈藥を買ひに行つてをりました岩下佐次右衛門、後の子爵方平氏であります。それから新納刑部、これらの人々が幕府より先きに出品いたして居つたところへ、今度は正式の幕府の代表者が堂々乗込んで來ました。これからが外交上の處々實々の手腕を弄するにいふ場面でありまして、なかなか薩藩の方にも手腕家がをりました。その言分は「薩摩侯としては幕府の下にあるかも知れぬが、琉球國王たる島津氏は幕府より獨立したる君主である、我々は琉球國兼薩藩の代表者である」斯様なエライ口實であつた、そこで響の印ある勳章を造りまして、これを薩摩琉球國の勳章として佛國官吏に贈つたのであります。なかなか機敏な遣り方でありました。この時に斯様な畫策をいたしましたのが、前申したモンブラン伯です、このモンブラン伯は先發の幕府の使節が到着したとき、使節に近付いて大いに利權を漁らうとしたのであります、使節は其評判を知り近付かなかつたので、反對に薩藩の尻押しをして、斯様な計畫を致しました。この人は後に薩藩に連れ歸られてをります。

とにかく斯様な勳章が薩藩の手で造られた。これは日本における勳章の始めだにいふことになつてをりまして、外交上の駆引の爲めに使つたところの歴史的に貴重なものであります。これには幕府の方でも驚いて、幕府側にも勳章をつくる計畫があつたさうです。その書類は賞勳局に引繼いであつたのであります、私も見ないうちに、惜い哉先年の大震災に焼けたにいふことあります。そこで幕府の連中が、甚だ怪しからん談判したのであるが、なかなか薩摩も負けてをらず、その際いろいろ雙方の間に交渉があつたが、依然として幕府の出品は別に、響の印のある獨立した一廓を設けて出

品して、頑張つてをつたのでありますが、何を申しても將軍の代表として昭武侯が來てゐるのであり、ナポレオン三世は昭武侯が皇太子と同じ年であるから、左右の手に執り列國外交團に紹介したので、流石の薩藩の宣傳も効果なく岩下、新納の兩氏はモンブランを伴つて、薩摩に歸つたのであります。これが極めて重大な問題であつて、國內の争ひをバリーの舞台まで持出したのであります。



斯様にいたしてをります間に、先程申上げた政權奉還といふことになり、更に鳥羽、伏見の戦に破れたりとは申しながら、前將軍慶喜公は猶ほ江戸城に割據してをり、日本の大名の大部分はなほ佐幕論者が多く、いづれも形勢はまだ判然してをりません。そこで列國外交團は、兵庫に寄つて相談したが、暫らく形勢を窺てをらうではないかといつてゐるころへ、妙などには當時幕府の方からも、明治政府の方からも、孰れも外交團に向つて局外中立を要求したのである。すなはち外國の力が政變に加はつては由々しき大事であるといふので、幕府側においても、また明治政府側においても、ともに慎重なる考慮の結果、鳥羽伏見の戦の始まらんとする正月三日に、幕府側においては酒井雅樂頭、板倉伊賀守、松平豊前守の名をもつてイギリス、フランス、オランダ、アメリカ、プロイセン、イタリーの各國公使に向つて局外中立の要求をいたしたのである。これについてもいろいろな話があるが、その話の極まらぬうちに幕府側が敗走してしまつた。越えて正月二十一日に至り、新政府は東久世前少將の名をもつて各國公使に對してこれまた局外中立の要求をしたのである。そこで外交團側においても、アメリカ側が主となつて會議を開いた結果、正月二十五日に各國は局外中立の布告をなした。布告文の内容はこゝに略すが、アメリカを主として外國が署名だけを異にし、同文の局外中立を布告したのであります。この時において官軍は、いよいよ大旗を進めて東海、東山、北陸の三道より江戸城總攻撃といふことになつたのである。そこで兵庫に集つてゐた列國外交團並に列國の艦隊は、直に横濱の方に引揚げて、この形勢が如何になるかを見望してをつたのである。一方官軍側は、征討大總督の錦の御旗を懸して、參謀西郷吉之助指揮の下に進軍し、三月十八日いよ

いよ江戸城總攻撃といふことに決したのである。ところがその前日に至り西郷隆盛は、いよいよ明日江戸城總攻撃を開始するが、幕府側においても最後の大奮戦を試みるに相違ない、さうなるに官軍側にも、多くの死傷者を生ずるは必然であるから、直に病院の用意をせねばならぬ、幸にイギリス公使パークスが横濱にゐるから、横濱で病院を借りやうといふことになつた。西郷の使としてこの交渉に行つたのが長州藩の參謀木梨精一郎、大村藩の渡邊清、後の渡邊男爵の二人が、横濱にあるパークスに交渉に赴いたのである。

この交渉に對しパークスが、二つ返事で引受けてくれると思ひきや、何ぞはからん儼然として剣ね付けられたのであつた。即ち「徳川慶喜既に恭順の意を表してゐるに、何の理由あつて官軍はこれを追討せんとするのであるか」「いやわれわれはその理由は分らぬ、たゞ命を奉じて参つたのみである」「答へたが、パークスなかなか承知しないのみならず」「一體戦争をするならばまづ外交團に通知し、居留地の安全を圖つて然る後なすべきである、近時しばしば官軍が横濱を通過して迷惑千萬であるから己びを得ず軍艦から陸戦隊を上陸せしめて居留地を保護してゐるのである」「ミ、全くもつて案に相違の言葉であつた。そこで木梨はその情況を早速西郷に報告した。この報告を受けた西郷はさすがに顔色が變つた。「これは困つたとなつた、實は幕府の勝安房が急に會ひたいと言つて來てをるが、それは確に明日の江戸城攻撃を止めて欲しいといふとであらう、勝の困つてをるともよく分るが、實は君達からの報告を受けて全くこちらも困つた、ミにかくパークスの話の件はしばらく秘密にしておいて呉れ」これでは明日の江戸討入りも止めなければなるまい、こいつてをるころへ、勝安房が御面會といつて來た。これから千兩役者の登場なるのである。そこで勝、西郷兩雄の腹藝があつて、江戸を平和のうちに明渡すことになるのでありますが、その顛末は餘りに有名であるから述べる必要はない。

このパークスの抗議によつて進軍を止めたといふ真相を知つてをるものは極めて稀で、第一に驚いたといふのが、當時東山道の先鋒として市ヶ谷の尾州藩邸、即ち只今の東京士官學校に駐屯してゐた參謀板垣退助である。板垣は直に馬を西郷の下に駛せて「一體明日の戦争を勝安房に胡麻化されて中止するミは何事である」「ミ、非常な權幕をやつて來たのであ

る。そこで西郷は「どうも君のいふことも尤もだが、實はかういふ譯で戦争が出来ない」ミパークスミの話の一條をするミ、さすがの板垣退助も「あ、左様であつたか」ミ歸つて行つたが、下の方の連中には尙更その真相が判らない。大村藩の隊長や、薩藩の村田新八、因州藩の中井半五郎もやつて来て「何故進軍を止めたのであるか、聞くミころによれば幕府が、夷人ミ結託して官軍の後を襲ふのであらう」ミだんだんミ話が間違つて來てゐる。兎に角彼等にも外交團の抗議があつたミいふことは、薄々は耳に入つてゐたのである。松平春嶽の書いた物によるミ、會つて西郷ミ英公使パークスミの會見において、英公使の曰くに「萬國の公法によれば、一國の政柄を執る者に對するに死をもつてするミいふことは、若し斯様なことをやるならば、人道正義のために英佛は共同して新政府を倒す」ミいつたミいふことになつて居る。兎に角進軍を止めるに至つた根本の理由は、當時パークスミのこの抗議が、重大なる影響のあつたミいふことは明かである。

然るにこのパークスの抗議の裏に、幕府側の勝安房の魔手が及んでゐるかミいふことは、大變際ミ問題で、無論秘密であるから判らないが、海舟日誌によるミ、三月二十一日のミころに、英國人が來訪我が心裡を話す彼善ミ稱すミある、それからまた二十七日のミころに、英公使パークス氏並に海軍總督キツプル氏を訪ふ此程の趣意を内話す、ミ記されてゐる、如何なる話の内容であつたかは判らないが、江戸城明渡前後において、勝が英國人に會つてゐるミいふことだけは判つてゐる。この勝安房ミ英國人ミの會見が、果してパークスの抗議に影響があつたかミいふことは判らぬが、若しこれに影響があつたミするならば、元來薩藩ミ親善だつた英國公使が、何故にかゝる舉に出でたのであるか、勝海舟に乗ぜられる如きパークスでないのに、かくの如き行動を執つて、西郷をして啞然たらしめたかミいふ問題でありませぬ。

これは別にむづかしいことではない、前に述べた通り、列國外交團としては局外中立を布告してをり、その布告後なほ數月を経ぬに、如何に傍若無人のパークスミいへミも、列國環視の下にこの取極めを破るわけに行かぬ、況んや當時フランスは幕府に金を貸して、經營してをつた横須賀造船所を、金を拂はないミいふ理由によつて、フランスが差押を行つたの

である。しかししてフランスはこゝを策源地として、東洋艦隊を集中してをつたので、若しパークスにして局外中立に違反の行動あらんか、フランスはこれを理由として艦隊を出動し、之に幕府の大艦隊に合するは明白である。さうなるに由々しき大事である、炯眼なるパークスはこれをよく知つてをつたからである。あの際に若しパークスに西郷が直接會つてをれば、この邊の事情も判つたのであらうが、使に行つた人達にはこの事情が判らなかつたものであるから、斯様なことになつたのであるが、少くもこの英佛の暗闘が、江戸城明渡しといふ最後の場面に至るまで、重要な力を持つてゐたといふことは、幕末史、維新史において極めて注意すべき事項であります。

更に局外中立のなほ解かれてゐないうちに、つぎに起つたのが甲鐵艦問題である。これは後に東艦を改稱され「日清談判破裂して、品川乗出す東艦、つゞいて金剛、浪速艦」に謠はれた當時有名な軍艦である。これはアメリカ南北戦争の際に餘つてをつた船を、幕府が注文して買受けたもので、ストンウォール號といひ、日本ではこれを甲鐵艦といつた、これは固有名詞で、鐵をもつて造られた軍艦はこれが初めてである。この甲鐵艦——後の東艦は幕府が買入れの契約をして、いよいよこれが日本へ廻航されて來たのが、政權奉還後の慶應四年四月二日、途中ハワイまで米國の旗を擧げて來たが、ハワイからは日本の旗を擧げて横濱へ入つて來たのであるが、局外中立を布告してをつた、めに更に米國の旗を擧げて、新政府にも幕府にもどちらにも引渡さなかつたのである。當時の海軍力を比較して見るに幕府の海軍力は極めて優勢で、官軍は各藩の力を併せても、辛うじてこれに匹敵するかさうか判らぬといふほどの状況であつたので、官軍側において、さうしてもこの甲鐵艦を手に入れなければならぬと努力したのである。全く當時においては、この軍艦が幕府側に行くか、官軍側に行くか、その何れに歸するかによつて、勝敗が極まるといふほどの有力な軍艦である。只今の言葉でいへば、超弩級艦に相當する堅艦であります。官軍は全體の海軍といつても、今日からいふとまるでお話にならぬ。一千トン以上の船が五隻あるだけで、川蒸汽の出來損ひ見たやうなものであつた。東郷元帥や先般亡くなられた井上元帥などは、

當時こんな船に乗つて仕上げられたなかなか偉いお方である。

扱て官軍はこの甲鐵艦を手に入れたのであるが、第一これに代價を拂ふ金の問題があり、また局外中立を撤去しなければならぬといふ二つの問題がある。この重要な問題の責任を負うて乗込んで来たのが、當時の青年外交家にしてはじめて中央に現れた大隈八太郎重信侯である。新政府の諸公は敵を斬るこゝについては得意であるが外交問題、財政問題は甚だ不得手である。そこへ當時白面の書生大隈八太郎が、何等の武勳を持たずして外交上の手腕、財政上の手腕をもつて中央政府に乗出して来たのであるから、此問題解決の任をも命ぜられたのである。そこで第一に金を用達しなければならぬのであるが、新政府にも當時金がない、大阪の御用商人に御用金を仰付けたのであるが、當時の大阪の富豪も、しばしば幕府や朝廷から御用金を仰付けられてゐた。御用商人もなかなか出さない、そこではゆる非常手段たる政府の権力や武力をもつて、血の出るやうな金、至誠奉公の金をもつて、さうやらかうやら二十五萬兩を非常な苦心をして集め、この金をもつて意氣揚々として、大隈が品川に乗込んで来て見るに、江戸城は明渡されたといへども、依然として幕府が海上権を持つてゐて、官軍においては一指だも染めるとが出来ない。入つて来る艦船は一々點檢される、愚圖々々としてゐる懷にある二十五萬兩を没收されるやうなこゝがあつては大變で、大隈侯は「朝廷の命を受けて出張したのである、慶再既に恭順の意を致してゐるに何事であるか」と一喝して機先を制し、そこで上陸して陸軍の大村益次郎のこゝろへ行つて、一體怪からんぢやないか、江戸城は明渡されたのに、海の状態を見ても市中の状態を見ても、チツトも秩序が立つてゐない、これでは官軍の威信が立つか、そこで大村のいふこゝには「君のいふこゝも尤もだが、金がなければ兵隊もない仕方がない、貴公は金を持つてゐるといふことだが、その金をこちらへ寄越しては貰へまいか」軍艦を交出すよりも、まづ江戸の秩序を恢復しなければならぬといふので、今度は大村が無理に大隈の金を取上げて、その金で上野の彰義隊討伐を行つたのであります。官軍もなかなか苦しい。

一方大隈侯の方では、金がなくなつてしまつた上に、米國からは局外中立を主張して甲鐵艦の引渡を拒まれ、さすがの

大隈さんも弱り切つたのであります。江戸城明渡し、甲鐵艦問題、西郷南洲、大隈八太郎この文武の二大偉人が局外中立に手をやいたのであります。そこで大隈侯は甲鐵艦問題はさてまいかん、夫よりは第一横須賀造船所を受出すにかゝるべきだが、これには金が要るがその金は大村の方へ廻してしまつた、これでは困つた、さうしたらよからうまいろいろ首を捻つた結果、大隈がパークスのところへ金を借りに行つた。實は大隈侯がはじめて外交上の手筈を現したのが長崎の問題で、パークスと談判をした際に、パークスはナーニこの背二才がまか、つて來たのを、大隈侯儼然と日本の特權を主張して名を現した、この正面の敵たるパークスに、頭を下げて金を借りに行つたのであるから、まことに閉口したさうである。いよいよパークスに會つて語をして見ると、二つ返事でよろしい、いくら必要であるか、五十萬兩要る、それではいふので早速東洋銀行から取出して貸して呉れた。この金で横須賀造船所を受出したのである。パークスの快諾は意外であつたが、これは何もむづかしい問題ではない、大體英國の正面の敵たるフランスが、横須賀造船所を差押へてゐるのである、その造船所を受出すための金を、イギリスに借りに行つたのであるから問題はない、二つ返事で貸して呉れたのである。何れにしても大隈侯の外交上の手筈は偉大なるものであつた。

兎に角斯やうにして横須賀造船所を受出すことが出來たが、一方局外中立の撤去はまだ出來ない、それは東北諸藩がなほ官軍に對抗してをつた、め、すなはち外交團としては、官軍の要求のみを聞くわけにはゆかない。後漸くにして明治元年の十二月二十八日に、いよいよ局外中立も撤去され、それと同時に、この長い間苦心した甲鐵艦も手に入つたので、いよいよ北海掃蕩いふことになつたのであります。北海道においては、榎本武揚が北海を平定して根據地をそこに構へ、函館の外交團に交渉の結果、英佛領事は榎本に對するに交戦團體、すなはち國家としての待遇を與へてをつたのである。この北海掃蕩についても、官軍が幾多の苦心をなめた末、結局榎本軍が敗れて悉く降伏し北海における局外中立も撤去されたのであります。

この幕末維新の政變において、英佛の暗闘が延いて局外中立となり、この兩大國の勢力によつて、幾多の波瀾重疊を生んだ一端を述べれば、大體斯様な狀況であります。元來幕末維新史の研究は、或は經濟史から、或は政治史から、また社會史から、いろいろ論ぜられてゐるが、外交問題が如何に最大の影響をなしたかについて、比較的閑却されてゐるやうであるので、ここにその一部分を述べた次第であります。(三七)

|| 昭和四・三・三三 ||

昭和四年十一月十五日印刷
昭和四年十一月二十日發行

開國文化（定價二圓）

複製を許さず

著作兼發行
兼印刷人

大 道 弘 雄

大阪市北區中之島三丁目三番
地株式會社朝日新聞社

大阪市北區中之島三丁目三番
地株式會社朝日新聞社

印刷所

大阪朝日新聞發行所

發行所

大阪市北區中之島三丁目三番地

株式會社 朝日新聞社